

臨終記

(北條民雄の最期を看取った東條耿一の手記)

彼（北條民雄）が昭和十二年九月の末、胃腸を壊して今年二度目の重病室入りをして以来、ずっと危険な状態が続いて来たが、こんなに早く死ぬとは思わなかった。受持の医師が、私に、北條さんはもう二度と立てないかも知れませんが。と云はれたのは彼が死ぬ二十日ばかり前の事であった。私はその時はじめてそんなに重態なのか、とびっくりする程迂闊に彼に接してゐたのである。来る春まではまあむづかしいにしても、正月ぐらゐは持越すものと信じてゐた。それほど彼は元気で日々を送り迎へてゐたのである。彼にしても、こんなに早く死が訪れようとは思はなかつたに違ひない。尤も死期の迫りつつあることは意識してゐたらしく、その頃の日記にも、「かう体を悪くしたのも、元を質せば自ら招けるものなり。あきらめよわが心。けれど、かう体が痩せてはなんだか無気味だ。ふと、このまゝ病室で死んでしまふやうな気がする。」また重態の日々が続いた後であらう、苦悶の様が書かれてゐる。「しみじみと思ふ。怖い病気に憑かれしものかな、と。慟哭したし。泣き叫びたし。この心如何にせん。」

その頃が最も苦しかったらしく、また、死との闘争も激しかったやうに見受けられた。私にも、おれはまだ死にたくない、どうしても書かなければならぬものがあるんだ。もう一度回復したい。と悲痛な面持で云った事もあつた。彼は腸結核で死んだのである。彼は最後の一瞬まで、哀れなほど実に意識がはっきりしてゐた。文字通り骨と皮ばかりに痩せてはゐたが、なかなか元気で、

便所へなども、死の直前まで歩いて行ったほどである。その辛棒強さ、意志の強靱さは驚くばかりであった。それでも死ぬ三四日前には、起上るにも寝返りするにも、流石に苦痛を覚えたらしく、私が抱起してやるとほっとしたやうに、さうして呉れると助かるなあ、と嬉しげであった。寝台が粗末で狭いので、瘦せこけてゐる背中あたりが悪く、剩さへ蒲団が両脇に垂れ下がり、病み疲れた体にはその重量がいたく感じるらしく、よく蒲団が重いなあ・・・と苦しげに咳いた。私が蒲団を吊つてやらう、と云ふと、彼は俄かに不機嫌になつて、ほつといて呉れ、君、ここは施療院だぜ。施療院の、おれは施療患者だからな。出来るだけ忍ばにやららんよ。それに蒲団を吊ると重病人臭くていかん。と怒つたやうに云ふのであつた。平素の彼が、全く我儘無軌道ときてゐるので、こんな時、思ひがけなく彼の真の姿に触れ、たじたじとさせられる事がよくあつた。

来る日も来る日も重湯と牛乳を少量、それも飲んだり飲まなかつたりなので、体は日増に衰弱する一方であつた。食べる物としては他に何も無いのであつた。流動物以外の物を一寸でも食べようものなら、直ちに激しい痛みを覚え、下痢をするらしかった。彼はよく、おれは今何もいらん。只麦飯が二杯づゝ食ひたい、そのやうになりたい、と云つた。創元社の小林さんからの見舞品も、殆ど手をつけなかつた。尤も、これはおれの全快祝ひに使ふんだ、と云つて、わざわざ私に蔵はせて置いたのである。

それらの品々は悲しくも、お通夜の日、舎の人達や私達友人の淋しい茶菓となつた。彼はまた口癖のやうに、こん度元気になつたら附添夫を少しやらう。あれはなかなか体にいい、やっぱり運動しなげや駄目だ。まづ健康、小説を書く

のは然る後だ、と云つて、よくなつてからの色々のプランを立ててゐた。そんな時の彼は恢復する日を只管待ち侘びてゐたらしく、また必ず恢復するものと信じてゐたやうであつた。小説はかなり書きたいやうだつた。君、代筆して呉れ。と云つたり、ああ小説が書きたいなあ・・・と悲しげに咳く事などもあつた。じつと寝たなりで居るので色々な想念が雲のやうに湧いて来るのであらう、おれは今素晴らしい事を考へてゐた。世界文学史上未だかつて誰も考へた事もなく、書いた者もない小説のテーマなんだと確信ありげに云ふ事もあつた。

病氣によいといふ事はたいやってみてみたらしいが、たいして効果は無かつたやうだつた。時には変つた療法を教へたりする人があると、真向から、そんなものは糞にもならん、あれがいいこれがいいと云ふものは凡てやってみたら、却つておれは悪くした。結局、病人は医者にいのちを委せるより他ないんだ、と喰つて掛る事もあつた。

死ぬ二三日前には、心もずっと平静になり私などの測り知れない高遠な世界に遊んでゐるやうに思はれた。おれは死など恐れはしない。もう準備は出来た。只おれが書かなければならないものを残す事で心残りだ。だがそれも愚痴かも知れん、と云つたのもその頃である。底光りのする眼をじつと何者かに集中させ、げっそり落ちこんだ頬に小暗い影を宿して静かに仰臥してゐる彼の姿は、何かいたいたしいものと、或る不思議な澄んだ力を私に感じさせた。私は時折り彼の顔を覗き込むやうにして、いま何を考へてゐる？と訊ねると何も考へてゐない、と答へる。何か、読んでやらうかと説くと、いや何も聞きたくない、と云ふ。静かな気持を壊されたくないのであらう。

彼の死ぬ前の日。私は医師に頼んで、彼の隣寢台を開けて貰つた。夜もずつ

と宿って何かと用事を足してやる為であった。私が、こん晩から此処へ寝るかな、と云ふと、さうか、済まんなあ、と只一言。後はまた静かに仰向いてみた。補助寝台を開けると、たいていの病人が、急に力を落したり、極度に厭な顔を見せたりするのであるが、彼は既に、自分の死を予期してゐたのか、目の色一つ動かさなかつた。その夜の二時頃十二月五日の暁前看護疲れに不覚にも眠ってしまった私は、不図私を呼ぶ彼の声にびっくりして飛起きた。彼は痩せた両手に枕を高く差上げ、頻りに打返しては眺めてゐた。何だかひどく昂奮してみるやうであつた。どうしたと覗き込むと体が痛いから、少し揉んで呉れないか。と云ふ。早速背中から腰の辺を揉んでやると、いつもは一寸触つても痛いと思ふのに、その晩に限って、もっと強く、もっと強くと思ふ。どうしたのかと不思議に思つてゐると、彼は血色のいい顔をして、眼はきらきらと輝いてゐた。こんな晩は素晴しく力が湧いて来る、何処からこんな力が出るのか分らない。手足がびんびん跳ね上る。君、原稿を書いて呉れ。と云ふのである。いつもの彼とは容子が違ふ。それが死の前の最後に燃え上つた生命の力であるとは私は気がつかなかつた。おれは恢復する、おれは恢復する、断じて恢復する。それが彼の最後の言葉であつた。私は周章てふために、友人達に急を告げる一方、医局への長い廊下を走り乍ら、何者とも知れぬものに対して激しい怒りを覚えバカ、バカ、死ぬんぢやない、死ぬんぢやない、と咳いてゐた。涙が無性に頬を伝つてゐた。彼の息の絶える一瞬まで、哀れな程、実に意識がはつきりしてゐた。一瞬の後死ぬとは思へないほどしつかりしてゐて、川端さんにはお世話になりっぱなしで誠に申訳ない、と云ひ、私には色々済まなかつた、有難う、と何度も礼を云ふので、私が何だそんな事、それより早く元氣になれ

よ、といふと、うん、元気になりたい、と答へ、葛が喰ひたい、といふのであつた。白頭土を入れて葛をかいてやるとそれをうまさうに喰べ、私にも喰へ、と薦めるので、私も一緒になつて喰べた。思へばそれが彼との最後の会食であつた。珍らしく葛をきれいに喰つてしまふと、彼の意識は、急にまるで煙のやうに消え失せて行つた。かうして彼が何の苦しみもなく、安らかに息を引き取つたのは、夜もほのぼのと明けかかった午前五時三十五分であつた。もはや動かない臉を静かに閉ぢ、最後の訣別を済ますと、急に突刺すやうな寒気が身に沁みた。彼の死顔は実に美しかった。彼の冷たくなつた死顔を凝視めて、私は何か知らほつとしたものを感じた。その房々とした頭髪を撫で乍ら、小さく北條北條と咳くと、清浄なものが胸元をぐつと突上げ、眼頭が次第に曇つて来た。彼が死んではや二週間、その間お通夜、骨上げ、追悼と、慌しい中に過ぎ、いま彼の遺稿の整理をし乍ら、幾多の長篇の腹案に触れ、もうあとせめて五六年、私の生命と取替へてでも彼を生かしてやりたかつた、としみじみとした思ひがした。残り妙ない彼の日記を読んでみるうちに、ふと次の詩のやうな一章が眼についた。彼のぼうぼうとした寂寥と孤独、その苦悩の様がほぼ窺はれるやうな気がするので、此処に引用する事を許して戴き、心から彼の冥福を祈りたい。

粗い壁

壁に白弄ぶちつけて

深夜、

虻が羽博いてる。